

明治期の小学校英語教授法研究 (2)

—— 杵田與惣之助『英語教授法綱要』の翻刻と考察 ——

Matsuda Yosonosuke's *The Outline of English Language Teaching* (1909) :

A Rarity Used as Teaching Material at a Normal School (Part 2)

江利川 春 雄

ERIKAWA Haruo

(和歌山大学教育学部)

2010年11月2日受理

Abstract

This paper discusses the exceedingly rare teaching material, *Eigo Kyojuho Koyo* (*The Outline of English Language Teaching*), handwritten and mimeographed in 1909 by MATSUDA Yosonosuke (1882~1960). Matsuda's handout, composed of eighty-four printed sheets, was distributed as a teaching guide to normal school students who learned English teaching methodology for elementary school pupils.

In this paper, the second one-fifth of his handwritten printed text is deciphered and quoted with annotations. The paper on the first one-fifth was published in February 2010. Matsuda's teaching material is quite unique and valuable as the first historical, systematic and comprehensive study of English teaching for elementary schools.

1. はじめに

本稿は「明治期の小学校英語教授法研究 (1) — 杵田與惣之助『英語教授法綱要』の翻刻と考察 —」(『和歌山大学教育学部紀要・人文科学』第60集、2010年2月刊；以後「第1報」)に続く第2報である。

したがって研究の意義・目的および杵田與惣之助^{まつだよそのすけ}(1882~1960)の人物像と彼が執筆した『英語教授法綱要』(1909：明治42年)の英語教育史的な価値等については第1報を参照いただきたい。

ごく簡単に紹介すれば、『英語教授法綱要』は杵田が愛媛県師範学校の教諭時代に授業資料として生徒に配布した手書き・謄写刷のプリント84葉(168ページ)を自家製本したもので、京都の杵田家に1セットだけ残された類例のない資料である。同資料の内容は後に大幅に増補改訂され、杵田が浜松第二中学校校長だった1928(昭和3)年に『英語教授法集成』(菊判494ページ)として謄写刷で自費出版されている。

小学校教員を養成した戦前の師範学校において、小学校英語教授法に関する授業内容はどのようなものであったのか。この点については、これまでほとんど知られていなかった。その点で、『英語教授法綱要』は明治末期における英語教授法教育の実態の一端を証言する希有な資料である。

それはまた、2011(平成23)年度から必修となる小学校外国語活動の指導法を考える上でも、貴重な示唆を与えるであろう。

そのため小論では、第1報と同様に、考察や注解は

最小限にとどめ、原資料を忠実に翻刻し紹介することに主力を注ぎたい。

2. 『英語教授法綱要』(1909)の翻刻と注解

『英語教授法綱要』の構成は以下の通りである。紙幅の関係で、この第2報での資料翻刻はゴシック体で示した第四章第三節から第五章第二節まで(全168ページ中の34ページ分)とした。

序言

第一章 本邦に於ける英語の略史

第二章 本邦小学校英語科の略史

第三章 欧米の小学校に於ける外国語科

第四章 本邦小学校英語科の目的

第一節 近世外国語教授の一般的目的

第二節 本邦に於ける外国語教授の必要

第三節 本邦小学校英語科の目的

第一 法令上及理論上より見たる本邦小学校英語科の位地

第二 本邦小学校に英語と限定せる理由

第三 本邦小学校英語科の目的

第四 本邦小学校英語科の設置

第五 本邦小学校英語科の教授時数

第六 本邦小学校英語科教授児童の編制

第五章 英語教授の方法

第一節 欧米に於ける近世外国語教授の諸方法

第一 読書法

第二 文法

第三 テキスト中心法

第四 暗誦法

第五 グアン法

第六 ベルリッツ法

第七 エナ学校法

第八 発音法

第九 革新派

第二節 本邦に於ける外国語教授〔法〕の略史

読書法時代—文法法時代—新式時代

第三節 英語科各分科の教授

第四節 英語教授法

第六章 英語教授と他教科との関係

第七章 参考書(省略)

〔教案例〕

【凡例】

- 一、原本の旧漢字は原則として新漢字に改めたが、仮名遣いは原文のままとした。
- 一、難解な漢字には適宜ルビを施した。
- 一、句読点、改行は原文のままとしたが、段落冒頭は一字下げで統一した。
- 一、判読が困難な字句は□□で示し、前後から類推できるものは〔* * ?〕で示した。簡単な注は〔 〕で文中に示した。
- 一、見やすくするために、章と節のタイトルは強調文字に改め、前の章および節との間に余白を設けた。
- 一、原本は縦書きだが、翻刻では横書きとした。

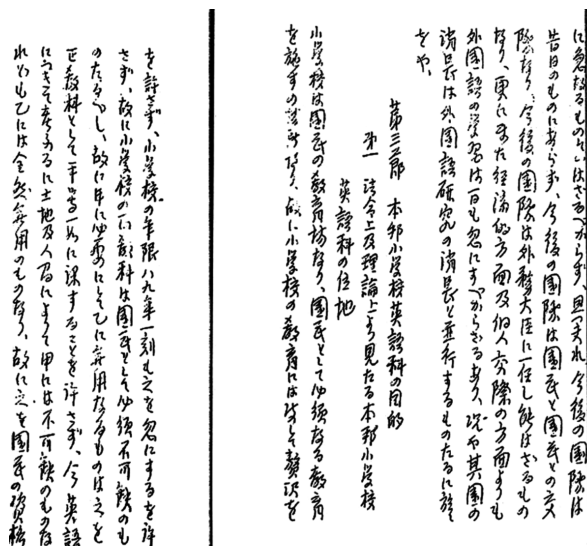


図1 『英語教授法綱要』第4章第3節

英語教授法綱要

第四章 本邦小学校英語科の目的

第三節 本邦小学校英語科の目的

第一 法令上及理論上より見たる本邦小学校英語科の位地

小学校は国民の教育場なり、国民として必須なる教育を施すの場所なり、故に小学校の教育には決して贅沢を許さず、小学校の年限八九年〔高等科を含む〕一刻も之を忽にするを許さず、故に小学校の正教科は国民として必須不可欠のものたるべし、故に甲に必要なにして乙に無用なるものは之を正教科として平等一如に課することを許さず、今英語につきて考ふるに土地及人間によりて甲には不可欠のものなれども乙には全然無用のものなり、故に之を国民の資格として平等一如に課するの理由を見ず、

且小学校時代に於ける幼弱なる頭脳に向て僅々二三年間の英語教授は到底良果を収むること不可能なり、これ吾人の経験に徹(?)して明なり、

然れども土地の情況によりては之が習学の欠くべからざるものあり、

□に於てか英語は之を正科として課するの要なきと共に之を随意科として課するの要あるを見る、

法令に於ては設置を随意とすると共に生徒の学習も之を随意となせり之れ至当の事といふ、かの一派の識者¹⁾の如く之を全廃するの要を認めず

第二、 本邦小学校に英語と限定せる理由

世界に於ける英語の勢力範囲は経済界なり、欧米諸国の商業用語として英語が比較的多く用ゐられつゝあるは事実なり、故に人或は英語を世界語なりと誇称す、

而して英語国民と我国との関係を見るに、英国とは政治上に日英同盟あり、米国とは政治上に覚書交換せられたるあり、而して我邦と英米間の経済上の関係は到底離るべからざるもの存ず、

且本邦に在住する英米人は諸外人の数を超へ、又我邦人の海外にあるもの亦英米国を最多となす、

殊に英米二国は地理的關係に於て大に接近せり、

以上諸種の〔事情?〕を考ふるに我国小学校の外国語には英語を採用するを以て当を得たるものといはざるべからず、然れども之れ唯一面の研究に過ぎず、故に吾人は更に英語外の諸外国語を採用し能はざるかを研究せんとす、

独語は近世外国語中最も論理的のものなり、故に厳密なる科学哲学の用語としては最も恰好のものなり、然れども世界一般の人間の生活上には到底英語の如き重要な地位を占めず、且つ政治、経済、地理的關係に於て到底英語と我邦との関係との比にあらず、故に之を小学校の教科とするの理由を見ず

仏語は流麗円滑、貴族並に国際用語としては実に世界的なり、然れども之れ一部分的なり、政治上に於ては

我と協約の締結あり又經濟上の關係も少しとせず、向者〔頃者＝近ごろ？〕仏学界なるもの組織せられ之か學習を奨励す、然れども到底英語を捨つて之を採るの理由なきを保ず、

其の他露語、伊語、西語等政治上經濟上地理的關係上大に我と親密なるものありと雖も、何れも英語と我邦との關係に及ばず、

〔頃者＝近ごろ〕清韓語を學習すべしといふものあれども之れ又一部少数者間に必要なるものにして、又英語を排して之に代るの値を有せず、

以上研究する所の表裏の理由により小学校の外国語は英語を採用すべき理由充分となる。

第三 本邦小学校英語科の目的

上来叙述せる所は小学校英語科の目的の如何あるべきかを推知せしむ、則ち教則に規定して曰く

第十五条(則) 英語ハ簡易ナル会話ヲ為シ又近易ナル文章ヲ理解スルヲ得シメ処世ニ資スルヲ以テ要旨トス
英語ハ発音ヨリ始メ進ミテ単語、短句及近易ナル文章ノ読み方、書き方、綴り方並ニ話し方ヲ授クベシ、
英語ノ文章ハ純正ナルモノヲ選ビ其ノ事項ハ児童ノ知識ノ程度ニ伴ヒ趣味ニ富ムモノタルベシ、
英語ヲ授クルニハ常ニ実用ヲ主トシ又発音ニ注意シ正シキ国語ヲ以テ訳解セシメンコトヲ努ムベシ

と則ち知る、小学校英語科の目的は実用的の英語力を与ふるにあり、然らば実用とは如何なることを意味するか、思ふにこは普通の日常生活上必要にして且つ實地に用ゐらるゝを意味す、故に所謂実用英語と称し單に会話の方面にのみ重きを置き以て偏したる英語の力を与ふるは採らざるものにして読み書き聴き語り得る統一ある普通卑近にして實際生活上に活用し得る英語力を意味するものなり、従て吾人は決して不具なる英語力を与ふべからざるや必然なり、

第四、 本邦小学校英語科の設置

小学校英語科の目的は前述の如し、従て之が設置も自ら此の目的によって定まる 法令に規定して曰く

第二十条(令) 高等小学校ノ教科目ハ修身、国語、算術、日本歴史、地理、理科、図画、唱歌、体操トシ女兒ノ為ニ裁縫ヲ加フ、
前項教科目ノ外手工、農業、商業ノ一科目又ハ数科目ヲ加フ、其教科目ヲ加ヘタル場合ニ於テハ児童ニハ農業商業ヲ併セ課スルコトヲ得ズ
土地ノ情況ニヨリ英語ヲ加フルコトヲ得
農業商業英語ハ之ヲ随意科目ト為スコトヲ得

之れによりて見れば英語科は

設置は設置せざるを本体とし随意設置を許し学習は

必須とするを本体とし児童の随意となすを得しむるものなり、

故に手工農業商業の一科目又は数科目が必設科にして其学習も必習を本体とし随意たるを得しむると其^{おもむき}趣を異にするものなり 而して、又曰く

第二十三条(令) 小学校ノ教科目ヲ加除シ若ハ随意科目ト為シ又ハ第二十条第二項ノ教科目ヲ定メントスルトキハ市町村立小学校ニ在リテハ管理者、私立小学校ニ在リテハ設立者ニ於テ府県知事ノ認可ヲ受クベシ、

参考 第六十条(令) 市町村長又ハ町村学校組合長ハ市町村又ハ町村学校組合ニ属スル国ノ教育事務ヲ管掌シ市町村立小学校ヲ管理ス
第六十□条(令) 市立小学校長及教員ノ執行スル国ノ教育事務ハ府県知事之ヲ監督シ町村立小学校長及教員ノ執行スル国ノ教育事務ハ郡長之ヲ監督ス

第六十六条(令) 私立小学校ニシテ市内ニ在ルモノハ府県知事之ヲ監督シ町村内ニ在ルモノハ郡長之ヲ監督ス

とあり、故に英語科の設置と之を随意科となすこととは市町村長又は学校組合長の与ふべき事務にして学校長又は教員の干渉すべき所にあらざるなり、

第五、本邦小学校英語科の教授時数

かくて設置したる英語科は幾何の時間之を課すること得るか法令に規定あり、曰く

第十八条(則) 高等小学校各学年ノ教授ノ程度及毎週教授時数ハ第五号表乃至第七号表ニ依ルベシ、理科、唱歌、手工、農業、商業ノ一科目若ハ数科目ヲ關クトキハ其毎週教授時数ハ学校長ニ於テ他ノ教科目ニ配当スルコトヲ得
英語ヲ加フルトキ又ハ女兒及第一学年、第二学年ノ男兒ノ為ニ手工ヲ加フルトキハ学校長ニ於テ他ノ教科目中ノ毎週教授時数中ヨリ二時以下ヲ減シ之ニ充ツベシ

第十八条ノ二(則) 第三十四条ノ規定ニヨリ二部教授ヲ為ス場合ニ於テハ教科目ノ毎週教授時数ハ管理者又ハ設立者ニ於テ之ヲ定メ府県知事ノ認可ヲ受クベシ、

第十九条(則) (第十七条)及第十八条ノ規定ニ依リ難キ事情アルトキハ管理者又ハ設立者ハ其ノ事情ヲ具シ府県知事ノ認可ヲ受ケ左ノ制限ニ於テ其時数ヲ増減スルコトヲ得、

一、尋常小学校ノ毎週教授時数ハ二十八時ヲ超ヘ又ハ十八時ヲ下ルコトヲ得ス

二、高等小学校ノ毎週教授時数ハ三十時ヲ超ヘ又ハ二十四時ヲ下ルコトヲ得ス、

第三十四条ノ規定ニヨリ二部教授ヲ為ス場合ニ於テハ毎週教授時数ハ各部十八時以上トス但シ

尋常小学校ニ於ケル年少ノ部ニ於テハ之ヲ十二
時マテニ減スルコトヲ得、
故に英語科に用ゐるべき時数は毎週二時以下たるべき
なり、

第六、本邦小学校英語科教授児童の編制

英語科は随意科となすを得、故に之が学習の児童数
は或は極めて小なることあるべきなり、故に法令には
数学級の児童を合せ同時に教授せしむるを得しめ同時
に其の人数は七十人を超過せざらしむ、然れども吾人
は英語科の教授は能ふ丈同一学力の児童を少数づ、教
授せんことを望む、英語の複式教授の如きは(吾人往々
にして見る所なれども)決して望ましき所にあらざる
なり、何となれば小学校に於ける英語科は充分に活用
せられざるべからざるものなればなり、法令参照すべ
し、

第三十三条(則) 修身、体操、唱歌、裁縫、手工、
農業、商業又ハ英語ハ数学級ノ全部又ハ一部ノ
児童ヲ合セテ同時ニ之ヲ教授スルコトヲ得、但
シ裁縫、手工、農業、商業、英語ニ就キテハ児
童ノ数七十人ヲ超エサル場合ニ限ル、

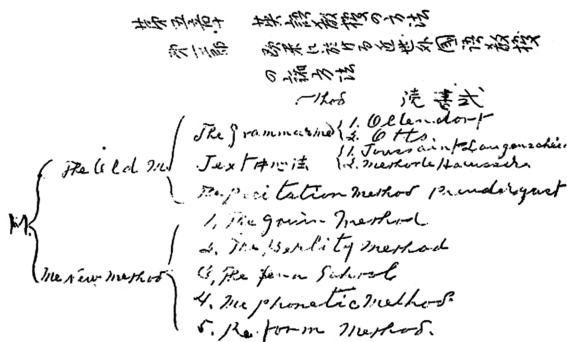
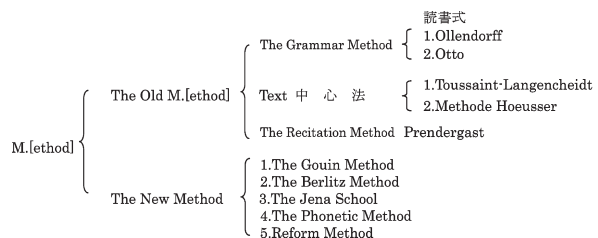


図2 原資料の第5章冒頭部分

第五章 英語教授の方法

第一節 欧米に於ける近世外国語教授の諸方法



外国語教授の方法には種々あり、而して之が分類は
又其の方法の性質上より種々あるべしと雖も吾人は今
之を右表〔上表〕の如く分類を試み、以て以下逐次之
が研究をなさんとす、表中古法といふは新法に対して
吾人が仮に名けたるもの、而して、新法といふは最近

に行はるゝ名称なり、

第一、読書法

名称の如く読書を主とするものにして最初より原書
を用ゐる眼によって読み且つ理會するを勉む、訳解を重
んじ、後には素読のまゝ、直に意味を悟るに至らしめん
とす、文法作文は読書の補助に止まる

(一) 本法の利

迅速に外国文学を読み得ること
良き文体を作ること知らしむ
自国語の□□を詰め内容を増加す
趣味の養成

(二) 本法の不利

発音の練習少し、
一般口頭上の練習少く又は全く欠く、会話力欠
乏
非実用的

第二、文法法

Ollendorff: *New Method of Learning to Read, Write, and Speak the French or German Language.*

Otto: *Conversation Grammar.*

此法は文法を基とし文法上の規則を説き之に例を挙
げ練習を課するものなり、

(一) 此法の利

速成独習に便なり、
年長の者に可なり、
翻訳力養成

(二) 此法の不利

実例と実例間に思想上の連絡を欠く
文物文化を知ることなし、
無味乾燥

第三、テキスト中心法

Toussaint Langenscheidt

此は通信独学のための方法にして一定のテキストを
定め、之を最始より少量づつ取りて、其発音、綴字、訳読
等を説明し、会話、文法を附随して教授す、而して、一個
のテキストを終ると共に一通の語学力を養ふを得るもの
なり、英語のテキストにはDickens *Christmas Carol* を
用ゐる、

(一) 此法の利

独学に可なり、
文法式よりも趣味あり、
一方に偏せざらしむ、
文物文化を知る

(二) 此法の不利

難易の排列宜しきを得ず、

Method Haeusser

独習用のものにて格別に説くべきなきも、独習法中最良のものなり、其の特長左の如し、

一、普通の独乙^{ドイツ}の文字に多少の記号を加へ発音を示すに課し注意せること、

一、読書の課毎に多数の対話を上せたること

一、答を出すに前ち問を一々繰返すに重きを置けること、

(一) 此法の利

読書課を毎回分解的に教へること

訳解を「可及的?」捨て、変化を設け反復せること、日常の事物を材料にとれること

(二) 此法の不利

口頭及耳の練習を欠くこと

発音に記号を用ゐたるも到底教師あるに如かず、

第四、暗誦法

Prendergast: *Handbook of Mastery System*

此法は暗誦式にして或る一文を教授し之を暗誦せしめんが為に幾回となく口唱せしめ、以て心的習慣を得しむるものなり、

第五、グアン法

此法は仏人グアン氏の創始せるものにして、氏は一八八〇年に其著 *The Art of Teaching and Studying Languages* を公にしたり、此法は或外国語中の最も普通なる語を簡單なる文章の形に於て彙類〔＝分類〕し、これを或る群に分ち、各群の語を共通の主格に結合せしむ、而して一群が一課をなし各課集りて一節をなし、数節相合して一章を作る、かくの如く一の series をなすを以て之を The Series Method と称す、蓋し觀念連合及心的現象の原理の上に立ちたるものにして、今日に於ても尚多く用ゐられつゝあるものなり、今此方法の実際を見るに、教師は各課を先づ口頭にて授け次に書につきて読ましめ又は板書して読ましむ、新語を教授するや教師は生徒をして眼を閉ちて其の語の内容につきての心象を喚起せしめ以て幾多の語々の連結^{きょうご}を鞏固にし以て一が喚起せらるゝときは直に他が連絡して生起する様ならしむるものなり、然れども此法にも実物絵画を使用する□□□□にあらず、教授中には自国語を用ゐるを妨げず、話は多く教師之を行ひ、生徒は不斷に之を繰返し又教師の問に答ふ、而して一課を終れば□に作文の教授を行ひ、文法教授の如きも早くより之を行ふ、然れども爾余の練習と結合せんことを力む、連続的文章に至ては之を単語集の終れる後に行ふ。

(一) 此法の利

動詞に重を置き文法上の仕組に巧なること

心理的原理に立てること

(二) 此法の不利

組織の精密に過ぎ活用の途乏しきこと

連環語中の或物は教授に不適当なること

全く想像によらんとし実物絵画等を棄てたること。

第六、ベルリッツ法

一八七八年独乙生れの米人 Berlitz 氏の創始にかゝり、欧米諸国に所謂 Berlitz School なるもの存在す、此法には特別なる教科書を用ふ、而して吾人は此教科書を手にするを得れども其か教授の実際は之を知ること難し、何となればそれは秘密に附しあればなり、然れども独乙の本□〔1字空き：『英語教授法集成』では「本^{ドイツ}営」〕に於ては教師に限り無料来観を許さる、此校は何れの級も生徒数は八名を超へず、

此式は其主義及実行の点に於て多く Reform Method と類似す、然れども其特に異なるは真の入門する生徒に毫も母国語を用ゐしめざるの点となす、而して教師は教へんとする外国語を用ゐて身振其他の方法を以て教授す、

(一) 此法の利

口耳の練習充分なること、

意味を直覚し得ること、

(二) 此法の不利

時間の浪費、

無用の混雑、

言語文章の精密なる意味に対して暫時霧中に在り、

文法上の活用を誤る

第七、エナ学校法

全然母国語を用ゐしめざる点に於てべ式に似たり、故に巧なる教師によるも多少の時間の浪費と、生徒が所要の単語、文書につきての意味の把束の漠然たること等を免るべからず、然れども不斷に強制的に外国語を理解し、外国語にて答へしめらるゝことは生徒の興味を激励す、此方法には絵画、地図等を用ゐ身振並に実地踏査等を生徒に行はしめ、又実生活の状況並に歴史等の説明を丁寧にし、其教授の順序は自然法による。

第八、発音法

Wilhelm Viëtor (1850—)²⁾氏の著により一八二二年〔一八八二年の誤記〕に産出したるものにして、こは外国語其物を用ゐ口頭上の練習に重きを置きたる点は別に新しきものならざるも、其の会話の進程の系統的にして又科学的に組織せられある点は実に出色のものとなす、先づ単及発音機の練習より始め子音母音を根底より練習し、生徒用書は発音学上の符号によりて印刷して普通の綴字を用ゐず、而して発音の練習充分なるに及び普通の綴字を教授す、又絵画実物によりて実生活の状況を知らしむるに務め、文法は之を帰納的

に教授し、作文は先づ会話により後に文章に及ぶ。

(一) 此法の利

発音を正くし、
談話上の確実なる知識を得しむること
帰納的に文法を教ふること
実物絵画により実生活を知らしむること、
口耳の練習より眼手に及べるは心理的なること、

(二) 此法の不利

文字的練習を欠くこと
読書力を充分に養ひ得ざること。

第九、革新派

Wilhelm Viëtor氏が一八八二年に革新派の旗を掲げた以来外国語教授界には絶えず論難行はれ、爾来世に示されたる此方面の研究、日に月に増加し、□□□〔3字空白；雑誌『英語教授』1908年10月号によればBreymannが入る〕氏の調査によれば一八八二年より一八九八年に至る十六年間に公にせられたる論文実に七百〇八篇の多きに達せり、而して□に所謂The Reform Methodなるものを□せり、此法の特色は左の如し

1. Reading forms the centre of institution.
2. Grammar is taught inductively.
3. The foreign language is used as much as possible throughout.
4. There are regular conversation exercises at every lesson.
5. The teaching is connected with the daily life of the pupil.
6. Objects and pictures are used in the earlier stages.
7. Realien are extensively taught, especially in the later stages.
8. Great attention is paid to pronunciation throughout but more particularly in the beginning.
9. Free composition is largely substituted for translation into foreign tongue.
10. Translation into the mother tongue is reduced to a minimum.

第二節 本邦に於ける外国語教授の歴史

読書法時代—文法法時代—新式時代

一、読書法時代

維新前の蘭学者の徒に用ゐたるは皆読書法なり而して此方法は外山博士の頃まで継続したり、

二、文法法時代

外山博士はオルレンドルフ、フアスケル、コンタンメー、ナフテル、プレンドーガースト、ドレイスブリ

ング等の教式を研究して、遂に文法を中心とせる正則英語読本³⁾を編し大に正則的教授を鼓吹せり、
時に明治三十年九月頃なり、

外山正一 英語教授法
文部省 正則英語読本

明治三十二年四月

内村鑑三 外国語教授法〔「外国語之研究」の誤記〕

三、新式教授時代

明治三十四年十二月

八杉貞利 外国語教授法

を著し以て、

Dr Sweet: *Practical Study of Languages*⁴⁾を紹介し、

三十三年十月 夏目金之助氏英語研究に英国に留学し

〔原著1行空白〕

を著し

三十三年十月 神田乃武氏英語教授研究として英国に留学し

三十六年二月 神田読本五巻⁵⁾を著し、
三十五年三月 岡田みつ氏英語及英語教授法研究の為に留学し

三十五年四月 岡倉由三郎氏英語及語学教授法研究のため留学

三十五年四月 茨木清二郎氏英語学研究に留学
三十六年四月 平田喜一氏 英語学及英語教授法研究のため留学

三十七年四月 永野〔武一郎〕教授 英語及英語教授法研究のため留学

三十六年十二月 栗野健次郎氏英語学研究に留学

三十七年十一月 杉森〔此馬〕教授英語学研究のため留学

三十八年

岡倉教授 本邦の中等教育に於ける外国語教授についての管見

” 最新外国語教授法を出して

Brebner: *The Method of Teaching Modern Languages in Germany*.

を紹介し、外国語教授の面目を改めたり

三十九年

*The English Teachers' Magazine*⁶⁾

出で

四十年八月

文部省夏期講習会(広島高等師範学校にて)

四十一年八月

同上(東京高等師範学校にて)

四十一年七月

文部省内英語教授法調査会調査報告草案出づ

〔以下、第三節に続く〕

4. 考 察

小学校で外国語を必修の教科として教えるべきか、選択科目とすべきか。時間数はどうするか。英語だけを教えるべきか、あくまで外国語として多様な言語に興味を持たせるべきか。こうした問題は、今日の小学校における外国語教育のあり方をめぐっても活発に議論されている。

まさにこうしたホットな問題を、奈良田與惣之助は第四章「本邦小学校英語科の目的」で100年以上も前に論じていた。

まず小学校英語科の法令上および理論的な位置づけを考察している。戦前の高等小学校における英語科は、1886(明治19)年の小学校令以来、一貫して随意科目(一種の選択科目)という位置づけであった。奈良田は法令をつぶさに分析し、小学校では英語科は「国民として必須なる教育」とは言えないと断じ、一律に課すことに反対している。その上で、英語を必要とする地域的なニーズがあり教員を得られる場合には、随意科目として課してもよいとしている。

続いて、「本邦小学校に英語と限定せる理由」を政治的、外交的、経済的関係から考察している。その上で、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語、中国語、韓国語を課すことの是非について論じ、「小学校の外国語は英語を採用すべき理由充分となる」と結論づけている。

「本邦小学校英語科の目的」に関しては、文部省法令の検討を通じて、「実用的の英語力」であるとしている。しかし、「実用」の意味をさらに吟味し、「実用英語と称し単に会話の方面にのみ重きを置き以て偏したる英語の力を与ふるは採らざるものにして読み書き聴き語り得る統一ある普通卑近にして實際生活上に活用し得る英語力を意味する」と述べている点が注目される。近年の小学校外国語活動においては、もっぱら「聞く」「話す」に重点が置かれ、文字指導は重視しない方針が打ち出されている。しかし、小学校高学年の知的発達段階を考えたとき、はたして奈良田が指摘する「単に会話の方面にのみ重きを置き以て偏したる英語の力」になりはしないか、大いに憂慮される。

その後の引用部分では、英語科を開設するにあたっての留意事項、時間数、児童数などに関する法令上の解説が詳細に述べられている。これらは、将来小学校教師になる師範学校の受講生に対して、学校経営的な観点から注意を促しているのであろう。

後半の第五章「英語教授の方法」では、いよいよ各種英語教授法の概説に入る。明治末期における英語教授法の移入・発達史を考える上でも、きわめて興味深い部分である。「第一部 欧米に於ける近世外国語教授の諸方法」では、読書法、文法法、テキスト中心法、暗誦法、グアン法、ペルリッツ法、エナ学校法、発音法、革新派の9つの教授法が紹介されている。講義用

要綱(プリント)のため、それぞれは簡略な紹介だが、講義用原稿をもとに刊行されたと思われる『英語教授法集成』(1928)では27種類の教授法が140ページにわたって詳述されている。戦前における英語教授法の移入史を考える上で、ともに第一級の資料であることはまちがいない。

「第二節 本邦に於ける外国語教授の歴史」では、教授法の発達史を「読書法時代」(江戸時代の蘭学から明治30年ごろまで)、「文法法時代」(明治30年以降)、「新式時代」(明治34年以降)という3つの時代で区分している。しかし、内容的にもいささか無理があり、『英語教授法集成』(1928)では「変則時代」と「正則時代」に変更している。

このあと、語彙、発音、綴方、講読といった各分科の指導法について考察が進むのだが、これらについては引き続き第3報で紹介したい。

注解

- 1) 小学校での英語の実施に対しては、1890(明治23)年ごろから廃止論が台頭していた。たとえば、西山森太「小学校の英語科廃すべし」(『教育報知』第230号、1890)、増山久吉「小学校の英語科を廃除すべし」(『教育時論』第279号、1891)など。また、岡倉由三郎も『英語教育』(1911)の中で、教師確保や母語習得の面から小学校での英語教育に反対していた。この方面の研究には、松村幹男『明治期英語教育研究』(辞游社、1997)第8章3節「小学校英語科廃止論」、江利川春雄『近代日本の英語科教育史』(東信堂、2006)第5章2-4-7「小学校英語科教育をめぐる論点」などがある。
- 2) ここではWilhelm Viëtorの没年が書かれていないが、彼は1918に亡くなっている。
- 3) 外山正一が編纂の中心となった全5巻の『正則文部省英語読本』(*The Mombushō Conversational Readers*)は、正しくは1889(明治22)年に出版されている。この教科書の使用法を盛り込んだ外山の『英語教授法』が出版されたのが1897(明治30)年である。
- 4) イギリスの音声学Henry Sweetが著した*Practical Study of Languages*(1899)の事実上の翻訳が、八杉貞利述『外国語教授法』(1901)。戦後は小川芳男によって訳され、『言語の実際研究』(英潮社、1969)として出版された。
- 5) 「神田読本五巻」とは、三省堂から発行された神田乃武著*Kanda's New Series of English Readers: Revised Edition*(1903: 明治36年4月13日文部省検定済)のことであろう。ただし、同書は改訂版であり、初版は1901(明治34)年2月25日に検定認可を受けている。
- 6) *The English Teachers' Magazine*(『英語教授』)

は1906(明治39)年12月に創刊された日本初の英語教師用雑誌。1917(大正6)年12月の第10巻第5号まで51冊が出た。広島高等師範学校のP.A. Smithが編集の中心となり、杉森此馬、渡辺半次郎、熊本謙二郎、岡倉由三郎らが参画した。1985(昭和60)年に名著普及会から復刻された。

主要参考文献

江利川春雄(2006)『近代日本の英語科教育史：職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』東信堂
江利川春雄(2008)『日本人は英語をどう学んできたか：英語教育の社会文化史』研究社
江利川春雄(2010)「明治期の小学校英語教授法研究

(1)：杗田與惣之助『英語教授法綱要』の翻刻と考察」『和歌山大学教育学部紀要・人文科学』第60集、pp.67-74.

大村喜吉・高梨健吉・出来成訓編(1980)『英語教育史資料』(全5巻)、東京法令出版

岡倉由三郎(1907)「英語教授法(小学校に於ける)」『教育大辞書』同文館

櫻井役(1936)『日本英語教育史稿』敝文館

杗田與惣之助(1928)『英語教授法集成』私家版

松村幹男(1997)『明治期英語教育研究』辞游社

脇屋督(1927)『最新 外国語の学習と教授』青々書院
(1931 改訂増補版)